

自己点検・評価表

平成19年度

新潟薬科大学応用生命科学部

教育職員

| 研究室 | 教授 | 頁 | 准教授 | 頁 | 助教 | 頁 | 助手 | 頁 |
|---------------|--------|----|-------|----|-------|----|-------|----|
| 動物・細胞生物学 | 市川 進一 | 1 | | | 伊藤美千代 | 36 | | |
| 応用微生物・遺伝子工学 | 梨本 正之 | 2 | | | 高久 洋暁 | 37 | | |
| 生物機能化学 | 石黒 正路 | 3 | 米田 照代 | 21 | | | | |
| 植物資源学・細胞工学 | 平岡 昇 | 5 | | | 相井城太郎 | 39 | | |
| 環境安全科学 | 及川紀久雄 | 7 | 川田 邦明 | 22 | | | | |
| 生物分子科学 | 武内 征司 | 9 | 中村 豊 | 24 | | | 小島 勝 | 48 |
| 化学・生物学 | 波田野義比古 | 11 | | | | | | |
| 化学・生物学 | 太田 達夫 | 12 | | | | | | |
| 食品機能科学・食品分析科学 | 小西 徹也 | 13 | 佐藤 眞治 | 26 | 西田 浩志 | 40 | | |
| 食品・栄養科学 | | | 三宅 紀子 | 29 | 永塚 貴弘 | 42 | | |
| 食品製造・食品工学 | | | 重松 亨 | 31 | 上野 茂昭 | 43 | | |
| 食品微生物・食品安全学 | 浦上 弘 | 16 | | | 小長谷幸史 | 45 | | |
| 食品生物学・分子科学 | 鱒坂 勝美 | 18 | 新井 祥生 | 33 | 宮崎 達雄 | 46 | | |
| 機能的食品開発 | 平山 匡男 | 20 | | | | | 中野 理子 | 50 |
| 英語 | | | 高橋 歩 | 35 | | | | |

委員会

| 委員会 | 頁 | 委員会 | 頁 |
|-------------|----|------------------|----|
| 教務委員会 | 51 | 地域交流委員会 | 67 |
| 学生委員会 | 52 | 合同 I T 委員会 | 68 |
| 入試委員会 | 54 | 防災環境委員会 | 69 |
| 広報委員会 | 55 | 自己評価委員会 | 70 |
| 予算・財務委員会 | 56 | 就職委員会 | 71 |
| プロジェクト関連委員会 | 57 | 倫理審査委員会 | 74 |
| 共通機器委員会 | 59 | 大学院教務委員会 | 75 |
| 実験動物施設委員会 | 60 | 大学院入試委員会 | 76 |
| 組換え DNA 委員会 | 61 | 博士後期課程設置委員会 | 77 |
| R I 委員会 | 62 | 将来計画委員会 | 78 |
| 図書館委員会 | 63 | F D 委員会 | 79 |
| 図書館運営委員会 | 64 | 産官学連携推進センター運営委員会 | 80 |

まえがき

平成 19 年度に本学に対する大学基準協会による大学評価が実施された結果、同協会の大学基準に適合していることが認定されました。評価結果ではいくつかの課題が指摘されています。総評に述べられている長所を大切にしていくな一方、不十分な点を改善することが求められています。シラバスの記載内容など、指摘事項をすでに改善した部分もありますが、これから継続して取り組まなければならないこともいくつかあります。その一つが外部委員による評価です。大学基準協会による大学評価は大学の組織としての評価ですが、今年度からこれまでに作成してきた「自己点検・評価表」などをもとに外部委員によるよりきめの細かい教育研究評価を実施する予定です。自己点検・評価の充実が本学部および本学の教育、研究、社会貢献に関する改善と向上に寄与することを願っています。

平成 19 年度の委員会の自己点検・評価表では新たに次年度（平成 20 年度）の目標についても記載をお願いしました。目標の達成に向けて各委員の皆さんのご協力をお願いします。

平成 20 年 5 月 19 日

応用生命科学部長

平 岡 昇

自己点検・評価表

平成 19 年度 自己点検票

| 職名 | | 氏名 | | 研究室等 | |
|---|--|----|--|------|--|
| <p>①教育活動（業績）</p> <p>学部授業：〇〇（〇年生〇期〇コマ）、</p> <p>大学院授業：〇〇（〇年生〇期〇コマ）、</p> | | | | | |
| <p>②研究活動（業績）</p> <p>発表論文：</p> <p>(1) 著者、論文名、雑誌名、巻、頁</p> <p>(2)</p> <p>学会発表：</p> <p>(1) 演題名、発表者、学会名、場所、年月日</p> <p>(2)</p> <p>著書：</p> <p>(1)</p> <p>特許出願：</p> <p>科研費：</p> <p>受託研究費：</p> <p>奨学研究費：</p> | | | | | |
| <p>③委員会活動</p> <p>法人役員：</p> <p>大学委員会：</p> | | | | | |
| <p>④社会的活動</p> <p>学会活動：</p> <p>非常勤活動：</p> | | | | | |
| <p>⑤教育・研究に対する提言</p> | | | | | |

| | |
|--|--------|
| 委員会名 | 教務 委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長 波田野 義比古</p> <p>委員 市川 進一、 新井 祥生、 川田 邦明、 高橋 歩</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>19年度は新カリキュラムの1年目なので、混乱なく移行できるように、特に1年次留年生にオリエンテーション時に履修方法を丁寧に説明した。また、新カリで導入した演習科目の効果について現在担当者の見解をまとめている。</p> <p>これまで転学部制度の細則が不備であったが、19年度に新たに転学部に関する規程催促を定め、転学部試験の実施要項を作成した。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>退職教員の補充が行われず、前任者に非常勤講師で選択科目だけでなく必修科目の講義を担当してもらう状況が続いている。近い将来に数名の教授が退職することから、研究室の再編も含めた教員組織の再編と、大幅なカリキュラムの改正が必要と考えられる。手遅れにならぬよう、今年度からでも基本構想のまとめに着手すべきであろう。当面は助教層を活用し、2年後を目途に専門選択科目の生理削減を中心とするカリキュラム改正を行いたい。</p> | |
| <p>平成20年度の活動目標（新委員長：波田野 義比古）：</p> <p>現在、新潟医療福祉大との間で教育連携の可能性について協議が始められている。</p> <p>今年度はさらに協議を進め、実のある形で教育連携の具体化を目標にする。</p> | |

| 委員会名 | 学 生 委 員 会 |
|--|-----------|
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長 太田達夫</p> <p>委員 鱒坂勝美 川田邦明 重松 亨 三宅紀子</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>4月 新入生の受け入れ、オリエンテーション学生指導（各学年）新入生歓迎会（大学会場歓迎会とホテル会場歓迎会を実施。どちらもアルコール無しとした）。アスペルガー障害支援チームにより、新学期授業開始のための詳細なプログラムを作成し、新潟発達障害者支援センターRISEの支援を受けながら大学生生活支援作を検討した（A棟2階に臨時的控え室を事務方から用意頂いた）。</p> <p>5月 学生駐車場の駐車許可発行（一部軽自動車専用区画として小さく画線し直して駐車数の増加を図った。結果的には申請数が前年を15%減少した）。卒業記念パーティ・卒業記念アルバム委員会編成指導（研究室代表を集め、会の発足とその後の支援）。</p> <p>6月 球技大会（移転統合二回目の統一大会。本学体育館とグラウンド、村松球技場、五泉市体育館を利用し、6/10日と6/16土に実施した）。アスペルガー障害支援会議（以下「AS支援会議」。RISEの支援を受け、当該学生の母親を加えて、これまでの大学生生活状況報告と今後の支援策を検討。毎日電車で通学できていることに家族が驚き・喜んでいる）。</p> <p>7月 東島・朝日町内会との協議会開催（学生の交通マナー及びアパートゴミ出しと駐車違反について注文あり）。後援会役員会（1年生委員の決定と前期の報告）。</p> <p>8月 新津松阪参加</p> <p>10月 新葉祭（ミニ講義を取りやめ、科学的な展示とビデオ映写を計画。大学御輿を運行した）。保護者面談会（1,3年生保護者対象、3回目）。</p> <p>12月 来年度の学生食堂運営会社のコンペ実施（津山商店とメフォスの2社が参加）。</p> <p>2月 スキー・スノーボードスクール（昨年に続き2月に六日町ミナミスキー場で実施、参加学生13名、引率教職員5名と少なかった）。学生（2年）の自損事故への対応。後援会役員会（予算と後期の報告）。</p> <p>3月 卒業式（学生表彰、卒業記念品選定、卒業証書配布）卒業記念パーティ（オークラホテル）。20年度の新入生歓迎会実施のための実行委員会編成指導（学友会長が不在の状態となり、新入生歓迎会を実施するための会を両学部学生に働きかけて編成、歓迎会の運営を計画させた）。AS支援会議（留年の決定を受けて来年度への対応を検討。民間の支援組織の就労訓練を並行させながら、来年度前期は通学することとなった）。</p> <p>支援を必要とする学生への援助：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 卒業研究配属研究室に馴染めなく休学していた学生Aについて配属研究室変更を手助けし、卒業に導いた。 ・ 卒業研究指導教員との意思疎通に困難を感じていた学生Bについて本人の言い分を聴取しながら、 | |

仲立ちをして卒業にこぎ着けた。

- ・ 過度に緊張しやすいSADの疑いのある学生Cについて、両親と連絡を取りながら、新潟大学病院に紹介するなど援助を行っている。
- ・ アスペルガー障害の学生Dについて授業履修のための各種援助を行っている。
- ・ 入学間もなく大学でリストカット騒ぎを起こした学生Eへの対応。周囲の状況を整えて安定を図り、無事進級。現在大学生活を楽しんでいて以前の面影はない。

問題点の提起：

1. 学生駐車場の整備・拡充及び管理運営方法の確立が求められる。ことに、来年度以降、新棟建築工事による影響の軽減策が必要である。
2. 朝日駐車場への道路の整備、街灯の整備が遅れている。せめて、砂利を買って置いて欲しい。
3. 交通安全の確保と事故防止注意喚起を継続しなければならない。
4. キャンパス周辺の環境整備が必要である。ボランティアを編成するなどしてごみ拾いなどを実施したい。
5. 心の健康に問題を抱えている学生が、その問題を相談する力が弱くなっているように感ずる。それをくみ取るための努力が必要である。
6. 来年度は新棟が建築されるが、学生生活への影響を最小限にする努力が求められる。工事日程やその影響などの周知を徹底すべきである。

平成20年度の活動目標（新委員長：太田達夫）：

1. 学友会が自律的に継続運営していけるようにシステムを構築する。このための規程見直しを行う。
2. セクシャルハラスメント相談委員を拝命しているが、この根拠規程を検討してその適用範囲を拡大すると共に、定期的な運営会議及び相談を受けたときの対応技術を学ぶ機会を設ける。
3. 学生相談の体制を整備する。

| 委員会名 | 入 試 委員会 |
|---|---------|
| <p>委員長及び委員氏名： 藤井智幸（委員長） 鯨坂勝美、梨本正之、佐藤眞治、米田照代、中村 豊</p> | |
| <p>年間の活動： 平成 20 年度入試では、一般公募推薦入試の基礎学力調査に新たに数学を導入し、選択可能な試験教科の組み合わせを増やした。また、調査書の学習評定平均値を 3.4 以上とした。推薦入試 11 月 17 日、センター試験 1 月 19,20 日、I 期 A 日程入試 1 月 28 日、I 期 B 日程入試 2 月 17 日、II 期入試 3 月 10 日、センター試験入試（A 日程・B 日程）を行った。入試ミスが発生しないように作題委員会に注意を喚起した。 一般入試に関しては、いずれの日程も志願者は減ったものの、合否判定の結果として実質合格率は昨年とほぼ同じとなり、II 期入試とセンター試験入試 B 日程については昨年を上回った。</p> | |
| <p>問題点の提起： 今年度は、入試ミスが無かった。しかし、今後も注意を喚起していくことが必要であろう。 I 期 B 日程入試において、受験者が無く中止に至った受験会場があった。受験会場の見直しと、受験会場を設けた地域への周知・広報を強める取組みの両方を議論する必要がある。志願者の減少に歯止めがかかってはいないが、これは県外志願者の激減が原因である。県外志願者が受験しやすい入試制度となるように、受験会場の選定を含めて工夫する必要がある。推薦入試の県外指定校に関して、本学に好意的な信頼できる高校を選抜し、個別に条件を緩和していく時期に来た。 薬学部の追加合格措置に伴い、入学予定者が減る事態が起こるので注意が必要である。</p> | |
| <p>平成 20 年度の活動目標（新委員長：武内征司）： 入試委員会の活動を強化し、平成 19 年度よりも志願者を増やし、入学者も少なくとも平成 19 年度を若干でも上回ることを目標にする。そのために、県内の指定校枠を広げるとともに県外の指定校の評定値の見直しを行い、オープンキャンパス時に主要駅頭にバスを配置するなど、参加者を増やす活動を強化し、更に SPP、SSH 等の高大連携を強化して、高校生と応用生命科学部との繋がりを強める活動を行うとともに、事務、薬学部と協力して、高校訪問活動を強化する。 応用生命科学部の受験生の減少と関連した一つの大きなファクターとして、薬学部の受験生の激減があるので、薬学部の受験生増加に結びつく活動を強化するように努力する。</p> | |

| 委員会名 | 広 報 委員会 |
|---|---------|
| <p>委員長及び委員氏名： 藤井智幸（委員長） 鯨坂勝美、梨本正之、佐藤眞治、米田照代、中村 豊</p> | |
| <p>年間の活動： 広報の主目的は入学生の確保である。少子化に伴い、大学全入時代を目前に控えて広報活動がますます重要となることは言うまでもない。平成 18 年度予算が 1870 万円であったところ、平成 19 年度では 2200 万円となった。 オープンキャンパスの充実を図り、6 月にも実施した。新潟県の「理科技術力向上モデル事業」に採択され、鯨坂教授の主導で高校生対象の講習会を実施した。 AO 入試・指定校推薦入試合格者の予備校模試成績優秀者を対象にした入学金免除の制度については、平成 18 年度にはゼロであったが、平成 19 年度では 4 名であった。</p> | |
| <p>問題点の提起： 県内に関しては、高校訪問が有効である。きめ細かく訪問し、高校サイドと情報交換することが大切である。ここでポイントは広報素材の発掘である。情報交換をする場合に、大学側から伝える良い情報が無ければ情報交換が始まらないのは自明である。学内の広報素材は数多あるはずで、これを効率的に吸い上げる取組みが求められる。本学の教職員は謙虚な面々が多いため、自発的な情報提供は頼りにならない。広報委員会による積極的な掘り起こし活動が必要と思われる。また、志願者減少分のほとんどは県外である。従って、県外対策は急務である。教職員による高校訪問のみでは限界がある。掘り起こした情報を、HP で発信することにより、更新頻度を高める努力が必要であろう。</p> | |
| <p>平成 20 年度の活動目標（新委員長：武内征司）： 平成 19 年度の総括を踏まえて、県内の高校教員との連携を強化して、SPP、SSH あるいは出張授業などを通じて、生徒と直接対話をする機会を増やす努力をする。県外の高校生への広報活動については、県内の活動スタイルを広げる工夫と結びつけた、高校側との連携強化に基づく高校訪問活動の内実化、及び上に述べられている直接高校生とつながる電子媒体を使った広報に力を入れる。そのために、例えば、新しく作成した教員のプロフィール集や高校生への学部紹介のために作成したパワーポイントを適宜選択して学部のホームページで公開する事を試みる。</p> | |

| | |
|---|----------|
| 委員会名 | 予算・財務委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長： 平岡 昇（学部長）</p> <p>委員： 波田野義比古</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>平成 20 年度予算を作成した。平成 19 年度と同様に各予算単位で一律 15%の予算削減を実施し、退職教員の補充を凍結し、帰属収入 928,113 千円、消費支出 923,229 千円で 4,885 千円の黒字予算を組んだ。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>平成 19 年度は定員を上回る入学生を確保できたが、1 年次での退学者が多かったため平成 20 年度 2 年生は 123 名となった。教員の不補充を継続して実施してもなお余裕のない予算編成となっている。学生の確保に努めるとともに、人件費の削減を図ることが引き続き求められる。</p> <p>財務は理事会の所轄なので、平成 20 年度より学部の委員会名から財務を削除して「予算委員会」と改称する。</p> | |
| <p>平成 20 年度の活動目標：</p> <p>研究費配分の適正性、高額共通機器の維持・補充のための方策を検討する。</p> | |

| | |
|--|-------------|
| 委員会名 | プロジェクト関連委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長： 及川紀久雄</p> <p>委員： 川田邦明、梨本正之</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>国際プロジェクト関連海外出張</p> <p>海外招待講演</p> <p>国際学会発表出張</p> <p>海外共同研究等連絡会議出張</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際プロジェクトを推進すべきであるが予算ゼロで海外の大学や研究所から共同プロジェクトに参加の呼びかけがあっても参加できない現状があること。 2. 海外学会等参加の予算、費用が少なく個人負担、研究室負担が多くなり限界がある。 | |
| <p>平成20年度の活動目標：</p> <p>個人の学会発表等の海外出張とは別に、海外の大学との共同研究など大学間相互交流を推進したい。特に姉妹校である北京医科大学、マサチューセッツ薬科大学との連携については応用生命科学部では実態が見えにくく、見直しが必要であると考えます。</p> | |

平成19年度 海外出張実績

| 番号 | 派遣教員 | 目的 | 期間 | 国名 | 補助 |
|----|--------------------------|---|--------------------------|-----------|-----------------|
| 1 | 教授 石黒 正路 | Pharmaceutical Sciences World Congress招待講演 | 自 19/4/21 至 19/4/30 | オランダ | 補助なし |
| 2 | 准教授 佐藤 眞治 | Pharmaceutical Sciences World Congress発表 | 自 19/4/21 至 19/4/29 | オランダ | 短期補助 60,000円 |
| 3 | 教授 平山 匡男 | メルボルン大学共同研究打合せ | 自 19/4/16 至 19/4/19 | 豪州 | 補助なし |
| 4 | 教授 小西 徹也 | Diet and Optimum Health Conference発表及び オレゴン州立大学における研究交流打合せ | 自 19/5/13 至 19/5/20 | アメリカ | 補助なし |
| 5 | 教授 小西 徹也 | The American Society for Cell Biology, 47th Annual Meeting発表及びIndiana University研究発表、打合せ | 自 19/5/31 至 19/6/4 | 台湾 | 補助なし |
| 6 | 助教 西田 浩志 | The American Society for Cell Biology, 47th Annual Meeting発表及びIndiana University研究発表、打合せ | 自 19/5/31 至 19/6/4 | 台湾 | 補助なし |
| 7 | 教授 浦上 弘 | International Association for Food Protection 2007 Annual meeting ポスター発表 | 自 19/7/8 至 19/7/14 | アメリカ | 補助なし |
| 8 | 助教 小長谷 幸史 | International Association for Food Protection 2007 Annual meeting ポスター発表 | 自 19/7/8 至 19/7/13 | アメリカ | 短期補助 60,000円 |
| 9 | 助教 西田 浩志 | 台北大学医学部における第7回AOB研究会発表 及び研究打合せ | 自 19/11/30 至 19/12/8 | アメリカ | 短期補助 60,000円 |
| 10 | 教授 平岡 昇 | 新潟県大学紹介セミナー | 自 19/6/13 至 19/6/15 | 中国 | その他 30,000円 |
| 11 | 教授 鯉坂 勝美 | 14th European Carbohydrate Symposium発表 | 自 19/8/28 至 19/9/10 | ドイツ | 補助なし |
| 12 | 教授 及川 紀久雄 | 四川省農業国際交流協会の招請による講演 及び有機農業の現状調査 | 自 19/10/8 至 19/10/15 | 中国 | 補助なし |
| 13 | 教授 平山 匡男 | 8th international Conference on Lactoferrin発表 | 自 19/10/20 至 19/10/28 | フランス | 補助なし |
| 14 | 教授 小西 徹也 | 日本(新潟)・中国・米国連携国際研究機構準備会 及び研究打合せ | 自 19/10/27 至 19/11/1 | アメリカ | 補助なし |
| 15 | 教授 小西 徹也 | 2nd International Symposium on Translational Research発表 及びHong Kong Univ.研究打合せ | 自 19/12/7 至 19/12/17 | インド 香港 | 補助なし |
| 16 | 教授 梨本 正之 | The Miami Winter Symposium Regulatory RNA in Biology and Human Health講演 及びCity University of New Yorkでの講演 | 自 19/1/30 至 20/2/9 | アメリカ | 補助なし |
| 17 | 教授 小西 徹也 | Oxygen Club of California 2008 World Congress 及び第4回食と健康の新潟国際シンポジウム準備打合せ | 自 20/3/11 至 20/3/16 | アメリカ | 補助なし |
| 院1 | 館脇 直人 | 研究会参加発表 | 自 19/5/31 至 19/6/4 | 台湾 | 損害保険 |
| 院2 | Reyad Ahmed ElBarbary | 研究会参加発表 | 自 19/5/29 至 19/6/3 | アメリカ | 損害保険 |
| 院3 | 五十嵐久美子 | 研究会参加発表 | 自 19/7/8 至 19/7/14 | アメリカ | 損害保険 |
| 院4 | 島名 沙知 | 研究会参加発表 | 自 19/7/8 至 19/7/14 | アメリカ | 損害保険 |
| 院5 | 櫻井 美仁 | 済州大学での研究 | 自 19/6/20 至 20/3/31 | 韓国 | 損害保険 |

| 委員会名 | 共通機器 | 委員会 |
|--|------|-----|
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長： 鯨坂勝美</p> <p>委員： 石黒正路、市川進一、川田邦明、佐藤真治</p> | | |
| <p>年間の活動：</p> <p>応用生命科学部は、各機器について保守契約を結ぶのではなく、故障が発生するごとに修理を行うという方式を取っている。平成 19 年度は 11 件の修理を行った。また、故障には至らないがオーバーホールの意味を含めて、NMR , I C P - M S , G C - M S について点検および補強を行った。</p> <p>薬学部では大部分の機器について保守契約を結んでいるが、平成 20 年度からその保守契約費の約 20% に相当する額を応用生命科学部の共通機器委員会費で負担することで、北川薬学部共通機器委員長と薬学部の機器を対等に利用できるという申し合わせを行った。</p> | | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>現在、応用生命科学部の管理機器、薬学部の管理機器とすることで別々に管理しているが、将来的には共通機器委員会を統一して大学全体の管理機器とすべきであると思われる。保守契約を結ぶか否かという点が大きな違いであるので、まずこの問題から今後協議を進める必要がある。</p> | | |
| <p>平成 20 年度の活動目標（新委員長：石黒正路）：</p> <p>昨年度の薬学部との申し合せをもとに、両学部の機器の効率的な利用と管理を進められるように具体的な運用について協議を進め、新しい利用形態を構築する。また、共通機器委員会として両学部が統一した委員会で運用を図れるように協議を進める。</p> | | |

| | |
|---|------------------|
| <p>委員会名</p> | <p>実験動物施設委員会</p> |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>佐藤眞治（委員長） 市川進一、三宅紀子</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>今年度からラットやマウスなどの小動物を飼育できる施設が F 棟 B2 の実験動物施設と E 棟 B1 のプレハブ型飼育施設の 2 箇所になった。これらの施設は薬学部と共同利用施設であるため、実験動物施設の利用規程の改定を行った。</p> <p>2004 年の日本学術会議において、学術研究、試験研究の不可欠な手段である動物実験を法律で規制するのではなく、自主管理体制により適正化するとの提言がなされた。この提言に従って新潟薬科大学実験動物施設の機関内規程を改正した。</p> <p>その他、利用者講習会、動物慰霊祭を行った。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>平成 20 年度から新しい実験動物施設の利用規程に従って施設を運営する。利用申請書などの提出書類が刷新されるため、周知徹底する必要がある。</p> | |
| <p>平成 20 年度の活動目標：</p> <p>平成 19 年度までは、薬学部と応用生命科学部の両学部に実験動物施設委員会があったが、平成 20 年度から新潟薬科大学の実験動物施設委員会として統一される。委員長は尾崎昌宣（薬学部）、委員は渡辺賢一、若林広行（薬学部）、佐藤眞治、市川進一、三宅紀子（応用生命科学部）である。</p> | |

| | |
|--|-------------|
| 委員会名 | 組換え DNA 委員会 |
| <p>委員長：梨本正之</p> <p>委員：市川進一</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>組換え DNA 実験申請の手伝い。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>特になし。</p> | |

| | |
|-------------------------|--------|
| 委員会名 | RI 委員会 |
| 委員長：梨本正之 委員：市川進一 | |
| 年間の活動： RI 教育訓練の手配。 | |
| 問題点の提起： 特になし。 | |

| | |
|--|----------|
| 委員会名 | 図書館運営委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長： 武内征司（図書館長）</p> <p>委員： 大野 智、藤原英俊、星名賢之助（薬学部）</p> <p>三宅紀子、中村 豊、重松 亨（応用生命科学部）</p> <p>白鳥 寛、滝澤紀子、五十嵐芳美（図書館）</p> | |
| <p>年間の活動：外国雑誌の年毎の値上げと本学の財政事情から、平成 18 年度に購読雑誌の見直しを行い、外国雑誌にかかわる経費を削減した。ところが、この際に行ったアンケートの方法に若干問題点があったため、各教員の研究に不可欠な雑誌が購読停止になってしまい、研究に滞りが出てきたという意見が相次いだ。そこで、教授から助手までの全ての教員に同じ持ち点を配分し、Nature と Science 以外の全ての雑誌を電子ジャーナルにし、平成 18 年度と同じ予算内におさめ、結果を各学部教授会で承認の上決定することにし、新規希望の雑誌も含めて、再度アンケートをやり直すことを 19 年度の中心活動にした。その結果、新規雑誌も含めてほぼ満足のゆく結果が得られた。その後希望が出された邦文雑誌の見直しも行うことが出来た。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>上述した見直しによって、平成 18 年度の決算規模での購読雑誌の決着が着いたが、雑誌の値段が毎年 10%近く値上がりする状況を考慮すると、定期的に見直しを図って予算の膨張を押さえる手だてが必要になるだろう。</p> <p>また、本学の自己点検・評価に対する外部評価の際に、「図書館の一般市民への開放を図るよう」との指摘を受けたので、今後近郊の市民や特に高校生などが気軽に本学の図書館に足を運ぶように、本格的に取り組みを強める必要がある。</p> | |
| <p>平成 20 年度の活動目標（新委員長：武内征司）：</p> <p>平成 19 年度に見直した外国及び国内雑誌の見直しが必要かどうかを見極め、必要ならば再度アンケート調査を行う。</p> <p>一般市民への図書館の開放を図るため、市報や FM 放送などを通じて市民への周知を徹底するとともに、近隣の高校や中学と提携して夏休みや冬・春休みなどの期間に利用しやすくする制度を作る。</p> | |

平成19年度
新潟薬科大学図書館運営委員会日程について

図書館長交代に伴う図書館長引継ぎ

- 日時：平成19年4月24日(火) 午後12時30分から
場所：図書館事務室
出席者：武内征司(新図書館長)、高木正道(前図書館長)、図書館事務:白鳥寛
内容：(1)委員会構成について
(2)今後の協議事項
(3)これからの行事
(4)図書館長業務

第1回 図書館運営委員会

- 日時：平成19年5月7日(月) 午後1時30分から
場所：A棟会議室2
出席者：武内征司(図書館長)
薬学部 大野智、藤原英俊、星名賢之助
応用生命科学部 三宅紀子、中村豊、重松享
図書館 白鳥寛、瀧澤紀子(書記)
議題 (1)平成18年度決算と平成19年度予算について
(2)外国雑誌、Annの見直しについて
(3)応用大学院の図書費の使途について
(4)地域開放について

第2回 図書館運営委員会

- 日時：平成19年6月4日(月) 午後1時10分から
場所：A棟会議室2
出席者：武内征司(図書館長)
薬学部 大野智、藤原英俊、星名賢之助
応用生命科学部 三宅紀子、中村豊、重松享
図書館 白鳥寛、瀧澤紀子(書記)
議題 (1)外国雑誌について
外国雑誌等に関するアンケートの趣旨およびルールについて
(2)Impact Factor: J.Citation Rep.について

第3回 図書館運営委員会

- 日時：平成19年9月13日(木) 午後1時10分から
場所：J棟セミナー室
出席者：武内征司(図書館長)
薬学部 大野智、藤原英俊、星名賢之助
応用生命科学部 三宅紀子、中村豊、重松享
図書館 白鳥寛、瀧澤紀子(書記)
議題 (1)外国雑誌について
外国雑誌等に関するアンケートの結果について
(2)Annual について

(3)平成20年度図書館運営費について

(4)新棟地下倉庫について

国内雑誌に関するアンケート実施についての打ち合わせと結果報告

日時：協議 平成19年11月6日(火)、7日(水)、8日(木)

結果報告 12月12日(水)

方法：メールによる協議

協議者：図書館運営委員会委員

内容：**国内雑誌雑誌に関するアンケート実施**

新潟県大学図書館協議会総会出席

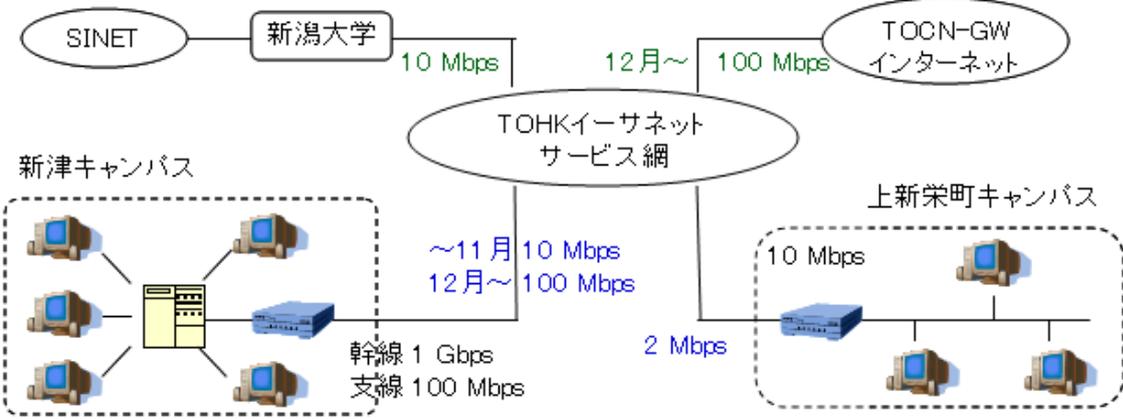
日時：平成19年7月11日(水)

会場：新潟県立看護大学(上越市)

出席者：武内征司図書館長、白鳥寛

| | |
|--|---------|
| 委員会名 | 地域交流委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長：小西 徹也</p> <p>委員：三宅 紀子</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>例年にならって地域交流講座を主催；新潟市、新津商工会議所、共催；新潟薬科大学、後援；バイオリサーチパーク株式会社により、大学の講義室を会場として以下のように開催した。</p> <p>第1回 平成19年10月13日（土） 講師 応用生命科学部准教授 川田 邦明氏 テーマ 農作物は安全？</p> <p>第2回 平成19年11月3日（土） 講師 応用生命科学部助教 高久 洋暁氏 テーマ 未来を切り開く微生物を利用したものづくり</p> <p>第3回 平成19年12月8日（土） 講師 応用生命科学部助教 相井 城太郎氏 テーマ 豊富な植物資源を有効に活用するために</p> <p>第4回 平成20年1月12日（土） 講師 薬学部教授 若林 広行氏 テーマ くずりはいつ飲めば効果的か ～飲む退院具で効き目を高めて副作用を抑えるには～</p> <p>昨年度、起業希望者対象と一般市民対象の講座を混在させて実施したため、企業からの参加者にも一般市民にも十分満足のいかない内容となってしまった回があったため、今年度から本講座の対象は一般市民に絞り、わかりやすい講演となった。また、今年度から本学の若いスタッフの講演を取り入れたが、非常に好評であった。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>地域交流講座は行政との連携も問題なく行われており、参加者の評価も非常に高く、リピーターの参加者も非常に多い。本講座は地域に根ざした大学として地域への還元の機会であると同時に、本学の研究内容を市民の皆様にご覧いただく機会としても重要である。今後、薬、食、バイオに関する最先端の研究をわかりやすく紹介する場として本講座は継続していくべきであると思われる。</p> | |
| <p>平成20年度の活動目標（新センター長：産官学連携推進センター 小西 徹也）：</p> <p>委員会の見直しに伴い、地域交流委員会の活動内容は産官学連携推進センターにおいて行われることとなった。</p> | |

平成 19 年度 IT 委員会実績報告

| | |
|---|--------|
| 委員会名 | IT 委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長：(応用生命科学部) 米田照代</p> <p>委員：(薬学部) 高中紘一郎、福本恭子、神田循吉、(応用生命科学部) 浦上弘、梨本正之、(事務部) 生野昭雄、(図書館) 図書館長、白鳥寛、(法人本部) 杉崎亮</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>① 4月のオリエンテーションで両学部の1年生にキャンパス内でのパソコン利用とインターネット接続について説明し、ノートパソコンの推薦を行った。また、事務部と共同で情報実習室でログオン講習・履修登録の会を行った。7月には両学部の1年生を対象にパソコンの所持や利用についてのアンケートを行った。これは、ノートパソコンの推薦の参考にするためである。</p> <p>② 5月末で@niigata-pharm.ac.jp と @niigatayakudai.jp のメールアドレスの使用は停止となり、nupals.ac.jp のドメイン名への移行が完了した。</p> <p>③ 6月に両学部の全学部生・院生にメールアドレスを配布した。</p> <p>④ 12月からインターネット回線速度を次のように増速した。</p>  <p>またこれとは別に情報実習室と食堂の無線 LAN で使用していた NTT 光回線 B フレッツも、TOCN-GW インターネット回線 100Mbps に変更した。(予算はサイバーキャンパス推進事業の補助金による)</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 情報実習室のプリンタでの無駄な印刷が多い。 ○ 委員会規定が未整備である。 | |
| <p>平成20年度の活動目標：情報実習室のプリンタに印刷枚数の制限を設ける。</p> | |

| | |
|---|----------|
| 委員会名 | 防災環境 委員会 |
| 委員長及び委員氏名：川田 邦明（委員長）、新井 祥生、市川 進一、浦上 弘、中村 豊 | |
| <p>年間の活動：</p> <p>有機廃液の処理（業者委託）を19年6月19日(処理量2000)、8月20日(処理量2000)、11月21日(処理量2000)、及び20年1月18日(2000)に行った。これにあわせて、ドラム缶の購入と、処理費用及び購入費用の支払いに係る手続きを行った。</p> <p>感染症法改正に関する説明会（東京）に浦上委員が出席した。これに基づいて、「病原体等安全管理委員会」が別途設置された。</p> <p>廃液保管用ドラム缶が満杯であることを明示するためのシールを作成し、保管庫に常備することとした。廃液投入者は、ドラム缶が満杯であることを確認した時点で、そのドラム缶に当該シールを貼る。これにより、従来から作成・使用している内容物表示用シールとともに、保管の状況が利用者や関係者に容易に判るようになった。</p> <p>廃液の漏出時の対応用としてクリアスピルキット（1セット）を購入した。</p> | |
| 問題点の提起：特になし | |
| 平成20年度の活動目標（新委員長：川田）：19年度と同様な有機廃液の処理（業者委託）を行う予定である。また、従前からの内容物表示用シールとともに、19年度から始めた満杯表示用シールについても、作成と使用を行う予定である。 | |

| | |
|--|---------|
| 委員会名 | 自己評価委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名： 佐藤眞治（委員長） 武内征司、浦上弘、太田卓馬</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>自己評価委員会の活動目標は、「教員の活動データを集積し、教員の教育研究状況、社会貢献活動、大学の運営状況を公表すること」と「大学の自己評価書を作成し、外部評価を受け、大学の教育力と研究力の向上を図ること」である。これらの目標を達成するために、平成18年度の自己点検・評価表を作成し、学生による授業評価アンケートを実施した。学生による授業評価アンケートの回答率を向上させるため、WEBでの授業評価を導入した。その結果、回答率が上昇した。更に、授業評価に対する教員のコメントをWEB上に公開した。</p> <p>正会員としての認定を受けるために自己評価書を作成した。作成した自己評価書に基づいて大学基準協会の審査を受けた。審査の結果、正会員としての認定を受けることができた。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>平成20年度に外部評価を計画している。この評価を受けるため、平成19年度の自己点検・評価表を作成する必要がある。大学院生による授業（特論・研究）評価法の確立について検討を行う必要がある。</p> | |
| <p>平成20年度の活動目標（新委員長：平岡）：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 昨年度実施された大学基準協会による大学評価で指摘された要検討項目について順次改善を図る。 2 平成19年度の自己点検・評価表を作成する。委員会実績報告に次年度委員長が次年度の活動方針を記載する項目を追加する。 3 これまでに作成した自己評価・点検表をもとにして本年度中に外部評価委員による評価を開始する。 4 学部学生による授業評価を引き続き実施するとともに、大学院生による大学院授業の評価法を検討する。 | |

| 委員会名 | 就職委員会 |
|--|-------|
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長： 武内征司</p> <p>副委員長： 及川紀久雄</p> <p>委員： 鰭坂勝美、浦上 弘、市川進一、川田邦明、佐藤眞二 田中竜太、塚田正之（事務部学生支援 G） 廣瀬利雄、坂爪しう子（事務部就職支援室）</p> | |
| <p>年間の活動：平成 19 年度の卒業生の就職及び大学院進学の結果は、別表 1 に示されている。就職に関しては 104 名希望者中 99 名が就職したため、就職率は 95%になる。大学院進学希望者は 29 名で全員が希望の大学院に合格した。平成 20 年度の 4 年生のために、平成 19 年度に行った就職支援活動の主なイベントは、別表 2 に示されている。この表に示されているイベントは、平成 20 年度卒の学生が直接関わる催しであるが、就職委員会、支援室及び各研究室の教員は、平成 19 年度卒の学生の就活を支援するために積極的に企業訪問を行った。また、各研究室の教員は自分の研究室の学生に責任を持ち、就職委員会及び支援室と協力して最後まで学生を励まし、大部分の研究室で 100%内定の目標を達成した。</p> | |
| <p>問題点の提起：就職率 99%を達成した平成 18 年度とは異なり、今年度はガイダンス等に参加しなかった学生や個人的な問題を抱えている学生が十数名おり、これらの学生が 11 月頃まで内定を得ることが出来なかった。この時期になると、募集をしている企業が極端に少なくなっており、彼等の就活を支援する活動は困難を極めた。就職委員会と支援室は、1 人 1 人の学生の状況を綿密に把握して、学生の希望に添って支援活動を強めた結果、99 名内定に到達することが出来た。残った 5 名のうち 2 名は、公務員試験に失敗した学生で 6 月頃の段階で次年度の再受験を決めてしまったもので、残り 3 名は個人的な問題を抱えて就職活動をしなかった学生である。今後このような傾向が強まると考えられるので、早い段階からこのような学生への適切な対応が必要になると思われる。</p> | |
| <p>平成 20 年度の活動目標（新委員長：浦上 弘）：応用生命科学部の就職率が高いこと、県内有力企業から多数の内定を得ていることは、地元の高校や在学生の父母からも高く評価されている。また、それが在学生に就活だけでなく、勉学に対してもやる気を与える好循環を生んでいる。これは、上に述べたような就職支援活動に負うところが少なくない。20 年度の活動もこの支援態勢を維持してゆくことになる。ほとんどの学生は自ら就職先を開拓しているが、毎年一部の学生が問題を抱えているのが事実である。その様な学生の抱える問題は様々であり、彼らへの対応は学生が所属する研究室の指導教員、時には学生の父母との連絡を密にすることで、個別に対処してゆくことが必要である。</p> | |

平成19年度『就職ガイダンスおよび行事』内容と参加結果

| 回数 | 月 日 | テーマ及び内容 | 参加人数 |
|-----|-------------------|--|------|
| 1回 | 4月13日(金) | 『就活オープニングセミナー』 ・就活を始めるにあたっての心構え ・学内における約束事について | 97名 |
| 2回 | 4月27日(金) | 『働くことの意義について』 ・働く事の大切さを考える | 91名 |
| 3回 | 5月11日(金) | 『就活こころの準備セミナー』 ・就職活動とは、何をどうすればいいの？ | 92名 |
| 4回 | 5月25日(金) | 『自分を知る』 ・自己分析の重要性とその仕方を学ぶ | 104名 |
| 5回 | 6月8日(金) | 『文章表現能力を高める』 ・新聞の読み方、読書の薦め、表現の仕方 | 100名 |
| 6回 | 6月15日(金) | 『文章表現能力を高める』 | 75名 |
| | 6月22日(金) | 一日会社見学会 | 121名 |
| | 8月3日(金)~ | インターンシップの実施 | 54名 |
| 7回 | 9月21日(金) | 『先輩からのアドバイス』 ・4年生による就活体験談を聞く | 89名 |
| 8回 | 10月5日(金) | 『就活キックオフセミナー』 ・本格的活動開始に向けての具体的アドバイス | 109名 |
| 9回 | 11月2日(金) | 『MR職についての研修会』 MR職を中心とした製薬業界の実態を学ぶ | 68名 |
| 10回 | 11月16日(金) | 『エントリーシート、履歴書の書き方』 ・応募書類の書き方の具体的指導 | 115名 |
| | 11月22日(木) | 製薬企業学内合同説明会 | 63名 |
| 11回 | 12月7日(金) | 『就活マナーセミナー』 ・ビジネスマナー、挨拶の仕方、身だしなみ | 106名 |
| 12回 | 12月21日(金) | 『効果的な面接の受け方』 ・面接の種類や対応策を学ぶ | 85名 |
| 13回 | 12月25日(火) | 『就活実践強化セミナー』 ・エントリーシート、履歴書の添削指導 | 45名 |
| 14回 | 2008年. 2月1日(金) | 『就活実践強化セミナー』 ・模擬面接及びグループディスカッションの実践指導 | 44名 |
| | 2月8日(金) | 学内合同企業説明会 | 90名 |

| | |
|---|---------|
| 委員会名 | 倫理審査委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>浦上弘（委員長）、三宅紀子、梨本正之、市川進一、平山匡男、渡邊賢一（薬学部）、豊島宗厚（学外）、 小林一三（学外）</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>19年度は、1件の審査請求があったのみであった。内容は、過去に審査され、「適」と答申した「ボツリヌストキソイドの学生への接種」であった。しかし今回は、万一に備えて保険に加入することをが提言されたため、調査した。その結果、適当な保険がないことが判明し、それも含めて「適」とした答申を学部長に提出した。しかし、学部長、学長より本学の顧問弁護士に相談することを勧められた。顧問弁護士の意見では、副作用への対処が万全でないトキソイドの接種には、細心の対応が必要であること、危険を伴う研究への学生の関与は妥当でない、というものであった。それを申請者に伝えたところ、申請が取り下げられた。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>これまで同様な申請に対して「適」の判断を下していたことが、妥当は言えないことが弁護士の意見より明らかになった。今後は、判断の難しい事柄に対しては、弁護士などの意見を聞く必要があると考える。また、弁護士の意見にもあったが、倫理審査委員会は、研究上の倫理問題を審査するものであり、安全上の問題は別の委員会を設置して行う方が妥当であろう。</p> | |
| <p>平成20年度の活動目標（新委員長：浦上 弘）：</p> <p>上に挙げた問題もあり、懸案であった委員会規定の見直しが進んでいない。もうひとつの理由は、薬学部にも同様の委員会がつくられる予定であることである。両学部にもたが倫理審査委員会を設置し、新たな規程を設けることが望まれる。また、学外委員に、現在お願いしている医師、宗教家だけでなく、弁護士も加える必要がある。これら、委員会の態勢を整えることが、20年度には必要である。</p> | |

| | |
|---|-----------------|
| <p>委員会名</p> | <p>大学院教務委員会</p> |
| <p>委員長及び委員氏名： 委員長：小西徹也、委員：梨本正之、佐藤眞治</p> | |
| <p>年間の活動： 修士論文研究の中間発表会を行った。修士論文の最終試験方法や論文発表会の審査基準などの諸規定を整えた。それらの規程に基づいて、第一期修士生の修士論文発表会・論文審査を行った。その結果、全員が合格した。</p> | |
| <p>問題点の提起： 実施上の問題は特に発生しなかった。特記事項なし。</p> | |
| <p>平成20年度の活動目標（新委員長：梨本）： 講義および研究の質を高め、世界標準レベルの大学院教育を行う。博士後期課程に進む予定の学生には、将来、独立して研究ができる能力を身につけさせるために、前・後期一貫した教育を行う。科学の共通言語である英語の能力全般の向上を図る。</p> | |

| | |
|---|----------|
| 委員会名 | 大学院入試委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長：石黒 正路</p> <p>委員： 米田 照代、三宅 紀子</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>大学院入試をスケジュールとおりに推薦、一次（9月7日）および二次試験（2月22日）を実施した。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1）大学院入試問題について、出題問題に偶然にも類似した内容がある可能性があり、この問題を解決するため、また出題内容の確認作業を行うため、次年度より入試委員があらかじめ問題を確認することにした。 2）入試において面接が少数の担当教授のみで行われていたことについて、その重要性を考慮して少なくとも各研究室の教授または准教授が出席して行う方法に変更することにした。 | |
| <p>平成20年度の活動目標（新委員長：石黒）：</p> <p>上記課題について実行するとともに、さらに大学院入試を充実させ、進学希望者を増加させるために経済的支援の方策などを含め大学院の教育・研究内容を学部学生に周知させてゆく。</p> | |

| | |
|--|-------------|
| 委員会名 | 博士後期課程設置委員会 |
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長：浦上 弘</p> <p>委員：武内 征司、川田 邦明</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>20年度に応用生命科学研究科博士後期課程の開学を目指して、18年度から活動を行っていた。しかし、薬学部の19年度入学生の大幅な超過により学部定員が規定数を超えたため、準備がほぼ完了したにもかかわらず申請を断念せざるを得なかった。19年度には、開学を21年度に変更し準備を行った。1年申請が延期となったことで、教員構成の変更を生じた。また、19年度に修士課程を卒業した学生と新潟大学の博士前期課程に進学していた本学部卒業生が、博士後期課程への進学を希望したため、本学の薬学研究科に進学することとなった。これらの対策が、昨年度の活動に追加された主な部分であった。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>定員超過による申請の断念は、予想以上に波及が大きく、このような事態が再び起きないような大学としての対応が必要であると痛感した。特に、進学するつもりが大学院が設置されなかった学生の期待を裏切ったことへの責任は、重大である。</p> <p>また、本学が対文科省折衝の経験が決して豊富でなく、戸惑うことも少なくなかった。応用生命科学研究科の設置などで折衝に当たった職員はすでに退職しているなど、経験を蓄積する態勢が大学として整っていないように感じられた。</p> | |
| <p>平成20年度の活動目標（新委員長：浦上 弘）：</p> <p>5月に正式申請する予定である。それまで文科省との事前相談、学内体制の整備を行う。大きな困難はないと期待しているが、21年度の開学に向け万全の準備を進める予定である。本学の薬学研究科に進学した学生への対応に関しては、実際に進学希望の学生が確定した段階での協議とすることになった。</p> | |

| 委員会名 | 将来計画委員会 |
|--|---------|
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長： 平岡 昇（学部長）</p> <p>委員： 波田野義比古（教務委員長）、太田達夫（学生委員長）、藤井智幸（入試・広報委員長） 武内征司（就職委員長）、鯉坂勝美（教授会選出委員）</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>本委員会から教授会に提起した管理栄養士養成コースの設置に関する委員会が発足して検討された結果、設置見送りの結論が出た。</p> <p>来年度の委員会活動の方針を検討する会を1回開催した。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>具体的な問題提起をする点で弱点があり、議論が煮詰まらなかった。</p> | |
| <p>平成20年度の活動目標：</p> <p>応用生命科学部の将来像の策定および脆弱な財務基盤を改善するための方策に関して項目を挙げて具体的な検討を進める。</p> <p>本学部の将来とも密接な関連をもつと考えられる医専の学部化について、教授会の意見の集約を行う。</p> | |

| 委員会名 | FD 委員会 |
|---|--------|
| <p>委員長及び委員氏名：</p> <p>委員長： 武内征司</p> <p>委員： 浦上 弘、佐藤真二</p> | |
| <p>年間の活動：</p> <p>応用生命科学部の FD 委員会は、平成 18 年度に既に立ち上げられていたが、実質的な活動は行っていなかった。その反省から、平成 19 年度から活動を始めるべく、先ず FD 活動で先進的な活動をされている、新潟大学「大学教育開発研究センター長」で新潟大学教授の濱口哲先生をお招きして、「学士過程教育改革と FD の役割」と題して、講演をして頂いた。これには、応用生命科学部のほとんどの教員と薬学部からも若干の教員が参加した（約 40 名）。この講演によって、FD 活動が必要になってきた背景と目的について認識を深める事が出来、応用生命科学独自に FD 活動をするための土台を築くことが出来た。</p> | |
| <p>問題点の提起：</p> <p>この講演会をきっかけにして、自己点検・評価委員会は学生による授業評価を、Website を使った方法に改め、学生の登録率が 90%を遙かに超えるという驚異的な結果を達成した。更に、教員への評価とそれへの教員からの回答もホームページで公開するようになった。このような前進面が出てきた半面、FD 委員会独自の取り組みは必ずしも具体的には進まず、学部新入生への授業の改善や特に準備中の大学院博士後期課程の申請との関連で、大学院の授業の改善の方法を模索する時期が続き、具体的に FD 委員会全学部会議の開催が年度内に出来なかった。</p> | |
| <p>平成 20 年度の活動目標（新委員長：武内征司）：</p> <p>平成 19 年度から学部新入生の授業のうち、「生物、有機化学、無機化学」について高校と大学の距離を縮めるため、演習を必修化したので、先ずはその 1 年間の総括を教務委員会にまとめてもらい、全学部 FD 会議を開いてディスカッションし、演習の改善を図る。</p> <p>平成 20 年度から大学院 FD 委員会が立ち上げられたので、それと協力して応用生命科学部及び大学院研究科の教育をどのように発展させるかを、FD 会議で議論する習慣を確立する。</p> | |

